

猫蓑通信

第 120号

令和五年
(2023年)
4月15日発行
(年4回発行)

近世俳画の世界

知られざるその魅力

伊藤善隆

先般、江東区芭蕉記念館で「俳画の楽しみ Enjoy HAIGA」(令和四年九月一日〜令和五年一月二三日)が開催された。私は、その監修をさせて頂き、江戸時代の俳画の魅力を再確認することができた。いっぽうで、俳画それ自体が、じつはあまり知られていないことも実感した。そこで、この貴重な誌面をお借りして、俳画の魅力の一端をお伝えできればと願う。

そもそも、「俳画」とは、省筆淡彩で描かれ、ある種の「俳趣」や「俳味」が感じられる絵画を指す。広義では必ずしも賛句を必要としない。つまり、画だけの作品も「俳画」と呼んでよいのである。しかし、やはり見えていて面白いのは、画に句を添えた「俳画賛」である。

なぜ俳画賛が面白いのか。その秘鍵は「余白」にある。俳画の一番の特徴は、画面の中に全てを細かく描き込むことをせず、余白を残すこと。いっぽう、短詩型文学である俳句もそれは同じ。芭蕉には有名な「いひおほせて何かある(もの



図1・榊良「終夜」自画賛

ごとを言い尽くして、後に何が残ろうか)」「(『去来抄』) という言葉がある。つまり、俳画も俳句も、余白が大事。この画と句の余白の組み合わせが、俳画賛の本質であり、魅力である。たとえば、図1の鹿を描いた三浦榊良(享保一四年〜安永九年)の作品はどうだろう。いっけんして、角があるから鹿だろう、とは思ってしまう。しかし、尖った三角形の頭や中途半端に細長い胴体は、カマキリのようなものもある。そして、この鹿がどこにいて、何をしているのか、といった説明的な要素は描かれていない。

●目次●

▼近世俳画の世界——知られざるその魅力

伊藤善隆

1

◎青木秀樹前会長追善

令和五年猫蓑会初懐紙作品 七巻

4

◎第十二回猫蓑会リモート作品・二十韻二巻

源心 一巻

8

◎第十三回猫蓑会リモート作品・二十韻二巻

9

▼藩主親子の祈り

平林香織

10

▼連句の先達・誌上インタビュー Q & A

10

その① 上月淳子さん

12

▼事務局だより

10

いっぽう、賛には「終夜なかに曉の鹿の声」とある。「一晩中待つていても鳴かなかった鹿だが、ようやく曉になってその声を聞くことができた」という句意。題に「曉夢」とあるから、この句の作者は、待ちくたびれて明け方にはウトウトと居眠りしてしまったのだろう。

秋に牡鹿が牝鹿を呼んで鳴くことは、古くから和歌に詠まれてきた。それを自分も聞きたくて一晩中待つていた、というこの句の作者は、かなりの風流人だ。ただし、この句に鹿の声やその姿については言及がない。

さて、以上の画と賛を合わせて、あらためて鑑賞するとどうだろう。極端にデフォルメされた牡鹿の姿はユーモラスだが、そのために妻恋

の切なさがより強く伝わってくるように思う。また、この句の主題は鹿の鳴き声、すなわち聴覚だ。そこに鹿の姿という視覚的要素が追加される。すると、句と画の印象や味わいはより具体的になる。つまり、余白があるため、描かれた情景や作品の印象が広がるのである。

また、この作品の場合、真つ先に目に飛び込んでくるのは鹿の姿。しかし、おそらくほとんどの方が「これは本当に鹿なのか、何だろう?」と思うに違いない。その答は賛句を読めば解決されるのである。つまり、俳画賛にはナゾナゾの答え合わせのような楽しさもあるのだ。図2の菅沼奇淵（明和二年〜天保五年）の作品も同

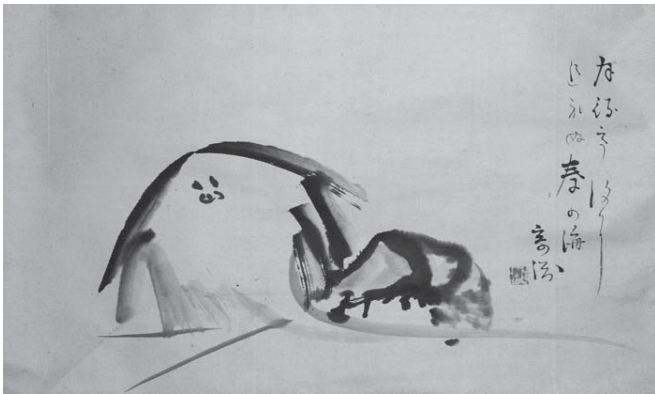
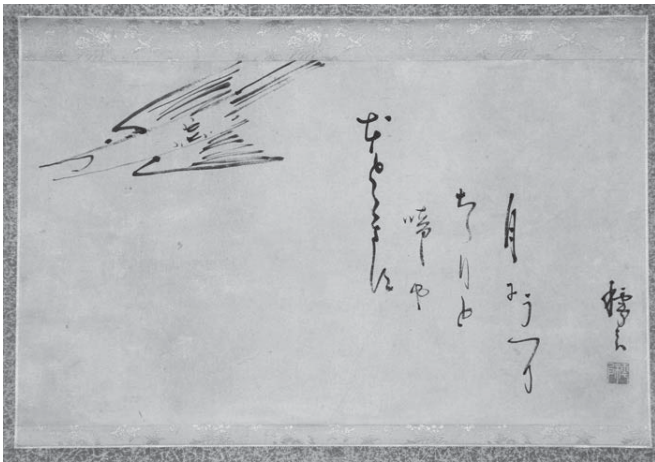


図2・大黒庵奇淵「月待て」自画賛

図3・樗良「月にうつり」自画賛



様である。

右側の「何か」が、左側の「切妻屋根の建物」にぶつかって、崩れ落ちているように見える。そこで賛句を参照すると

「月待て汐に追れぬ春の海」とある。とすれば、海を詠んだ句であるから、「切妻屋根の建物」はエイ、「何か」はエビである。と合点がいく。つまり、エイは裏側（腹側）が描かれており、顔のような模様は口と鰓穴なのである。

樗良も奇淵も、江戸時代の俳人と

しては重要な人物

だが、一般的には

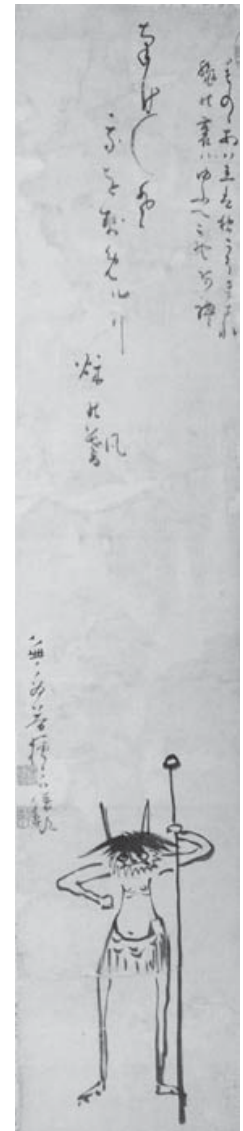


図4・樗良「なげくと」自画賛



図5・長沢芦雪・士朗「木がらしや」画賛

ほとんど知られていないのではなからうか。とくに樗良は、蕪村とも交流のあった俳人だが、蕪村とはまた異なる魅力を持った独特な俳画賛を多数残している。たとえば、図3はホトトギスを描いたもの（賛句は「月にうつりちらりと啼やほととぎす」）、図4は鬼を描いたものである（賛句は「なげくと我をせめけり秋の風」）。さて、以上は自画賛だが、俳人と有名絵師との合作も多く残っている。たとえば、図5は「奇想の絵師」として有名な長沢芦雪（宝暦四年〜寛政一年）と名古屋を代表する俳人である井上士朗（明和二年〜天保五年）の合作（賛句は「木がらしや日にく鶴のうつくしき」）、図6は、洋風画・銅版画で知られる司馬江漢（延享四年〜文政元年）と美濃派の大野傘狂（享保一二年〜寛政五年）の合作（賛句は「独活の香やある日は蝶も舞つゝめで」）、図7は『江戸名所

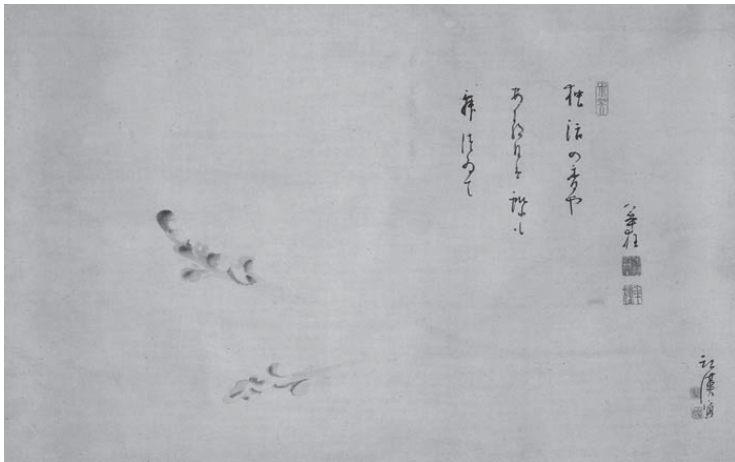


図6・司馬江漢・傘狂「独活の香や」画賛

図会』の挿絵を描いた長谷川雪旦（安永七年（天保一四年）と吉田国甫（生没年未詳）の合作（賛句は「みな真向なれ一年のはかりごと」と）である。

このうち、図7は正月の句で、斜めに大きく描かれているのは橋脚、その向こうに宝船が描かれている。なかなか斬新な構図である。

ところで、自身も俳画をよくした渡辺華山（寛政五年〜天保一二年）は、俳画を「俳諧絵」と呼び、「すべておもしろくか【描】く気あしく、なるだけあ【悪】しく描くべし」と言っている

（『華山先生俳諧画譜』）。つまり、「面白く描こう」としてはいけない、悪くかくべきだ」というのである。この主張は、常識的な価値観を顛倒している興味深い。いつてみれば、俳画は、現代の「ヘタウマ」の祖先なのである。

ヘタウマを主張した華山は、図8のような画賛を描いている。たしかに、何を描いたものか、いつけんヘタクソでよく判らない。しかし、賛句に「籠の目や潮こぼる、初松魚」とあるので、初鰹を食べる際の薬味の大根おろしを卸し金で描っているのだと理解できる。なお、この句は華山が詠んだ句ではなく、葉拾という蕉門時代の俳人の句で、『続猿蓑』に載っているもの。華山の俳画賛は、たいていは古句を揮毫し、そこに絵を添えたものである。

さて、美術史家が俳画を研究対象とすることは、それが有名絵師の作品であっても、実はほとんどない。美術史家の研究の中心は本格的な絵であって、俳画までは未だ十分に調査が及んでいないのである。また、俳画の描き手の多くは、専門の絵師ではなく俳人である。そのため、蕪村などのごく限られた描き手を除けば、美術史家が研究対象とすることはない。さらに言えば、文学研究者が俳画を研究対象とすることもあまりない。美術史の知見がどうしても不足するからである。そのため、俳画が注目される機



図7・長谷川雪旦・国甫「みな真向なれ」画賛



図8・渡辺華山「籠の目や」画賛

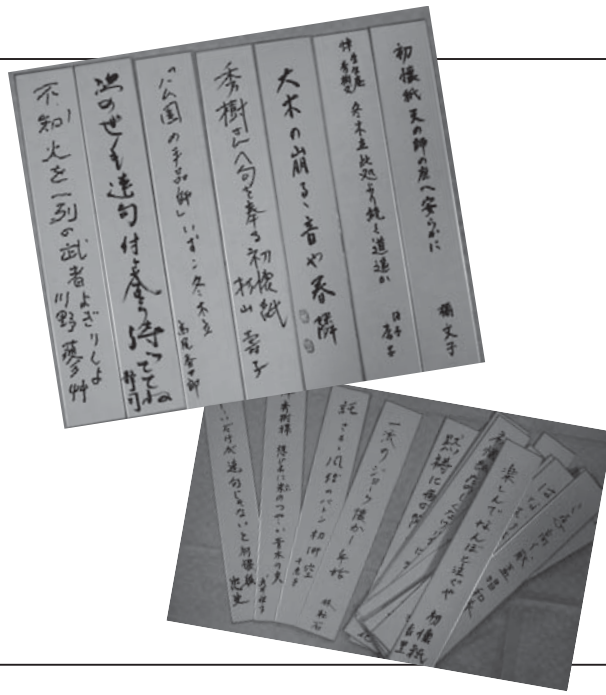
会は、意外に少ない。本稿の冒頭に記したとおり、俳画それ自体が一般的に知られていない理由は、そうした調査・研究の不足にある。

なお、華山は、俳画の歴史を以下のように述べている。「俳諧絵は、唯趣たのしみを第一義いちぎといたし候。元禄のころ一蝶・許六などあれども、風韻は深省などまさり候。此風流の趣は、古き所には無く、滝本坊・光悦など初まりなるべし。はいかゝ【俳諧】には、立圃見事に候。近頃、蕪村一流を初め、おもしろく覚え候」（『華山先生俳諧画譜』。すなわち、俳画の起原を松花堂昭（P9上段へ続く）

第百六十二回例会
令和五年初懷紙作品

1~3

猫蓑会の令和五年初懷紙は、故生庵青木秀樹前会長追悼興行として開催されました。来賓として捌をお願いした川野蓼艸、小林静司、高尾秀四郎の三氏に感謝いたします。



●来賓、宗匠、当日の捌による追悼句

不知火を 一列の武者よぎりしよ 川野蓼艸
 次の世も 連句付き合おう待ってね 小林静司
 「公園の手品師」 はずこ冬木立 高尾秀四郎
 冬木立此処より 続く道遙か 緑華亭孝子

初懷紙天の師の座へ安らかに
 大木の崩るゝ音や春隣 朱鷺庵文字
 託さるゝ風雅のバトン初御空 一紅庵良子
 秀樹さんへ句を奉る初懷紙 鈴木千恵子
 楽しいだけが連句じゃないと初懷紙 杉山壽子
 森下の良き日還せや冬鷹 根津忠史
 佐藤徹心

●当日の連衆による追悼句

黙禱に色の際立つ福寿草 荒木鑑
 はなむけは白き寒梅永遠の旅 石川葵
 梅ヶ香の漂ふ幹のたくましく 岩崎あき子
 懐旧の言の葉へちらちらと雪 鶴飼桜千子
 冬晴れや想ひ起すは快男子 宇田川肇
 こゑ高く猷盃唱和春を待つ 内田遊眠
 二次会はどこに行こうか初懷紙 大島洋子
 黒の似合ふ男ありけり冬木立 奥野美友紀
 冬日向大きな背のある如し 江津ひろみ
 真青なる宙ととのひて冬深し 近藤純子
 名人の集ふ天の座冬ひと日 佐々木有子
 楽しんでなんぼと注ぐや初懷紙 式田香里
 おもかげや紫煙くゆらす初懷紙 高塚霞
 アルプスの天を摩す橋旅初 高橋豊美
 初懷紙たのしくなけりや口癖で 武井敦子
 想ひ出に朱のつやゝか青木の実 武井雅子
 冬の春やあと明るい声のして 西田荷夕
 一流のジョーク懐かし年始 林 転石
 初苗なくてぞ人は恋しかりけり 平林香織
 転じ方説く師の御声もみじ散る 三木俊子
 冬晴れやおうといふ声降ってくる 宮川尚子

惠比須の座
 二十韻「不知火」 川野蓼艸 捌

不知火を 一列の武者よぎりしよ 蓼艸
 波を静める月光の声 桜千子
 洪柿を干しては腰を伸ばしぬて 孝子
 イヤホーンから流れ来るジャズ ひろみ
 磨かれし盃も揃ひし夏館 純子
 帷の中に忍び込む美女 孝
 辛いのは物陰でつと抱かれる身 み
 アドレナリンのふつふつと沸く 桜
 チェンソーの唸りのとばす樹木の香 全
 寒鰯を糶る振ちり鉢巻き 孝
 ナオ地吹雪に車動いてまた止まる 全
 幕下力士前にひたすら 全
 恋情の言へぬ言葉を囁みしめて 桜
 在宅勤務見直した君 純
 信濃なる浅間の峰に月涼し 孝
 博士になると決めた菖蒲湯 純
 ナウ歯科医師の抜くこともなく親しらず 桜
 春のあらしに株価大揺れ 桜
 花びらを零しひと指し舞扇 孝
 手のひらに見る猫の仔の夢 み
 連衆 鶴飼桜千子 坂本孝子 江津ひろみ
 近藤純子

第百六十二回例会
令和五年初懐紙作品

4 ~ 7

弁財天の座
歌仙「秀樹さん！」 杉山壽子 捌

秀樹さん！ 句を奉る初懐紙
 雅 壽子
 楽しくやらう酌み交はず屠蘇
 雅 肇
 ビル街は忙しき人で賑はうて
 洋 肇
 巡回バスは時刻通りに
 俊 子
 杵つきの兎指さす月見の子
 雅 俊子
 刈安分けてあゆむ河原
 洋 肇
 爽やかに響いてくるはときの鐘
 肇 肇
 谷の庵に訳ありの僧
 俊 肇
 家庭科で育児楽しむいい仲で
 肇 俊
 妙にリアルな今のママゴト
 洋 肇
 スーパーで安いと言はずリーズナブル
 俊 肇
 既読の通知まだつかぬまま
 洋 肇
 登山道そろそろ月の昇る頃
 雅 肇
 蛇の衣を後生大事に
 洋 肇
 縄文の中期の土器は派手となり
 肇 肇
 デザイナーズマンション住み辛いけど
 俊 肇
 天窓を開ければ花の舞ひ落ちる
 洋 肇
 木屋町通り点す春の灯
 雅 肇
 ナオ多言語の飛びかふ声と百千鳥
 壽 肇
 学童保育肌もいろいろ
 俊 肇
 神前式拜礼のち朝礼に
 肇 肇
 警備会社の固い約束
 洋 肇
 国境線争ふ先に好きな彼
 雅 肇

マントにくるまり狂ほしき夜
 洋 肇
 フローズンダイキリ好む作家あて
 雅 肇
 釣り糸たれる老人の夢
 肇 肇
 平民が宰相となる例もあり
 肇 肇
 駿府詣でに茶の香り染む
 俊 肇
 曜変は月の光に輝きて
 洋 肇
 アールヌーボー秋の洋館
 肇 肇
 ナウ故郷の味は蜂の仔飯でせう
 雅 肇
 遺伝操作で博士一号
 肇 肇
 気に入りの健康器具に乗つてみて
 俊 肇
 JALのバックで旅をした日々
 雅 肇
 花を背に記念撮影Vサイン
 俊 肇
 競漕会を見学の衆
 執 肇

布袋の座
 連衆 武井雅子 宇田川肇 大島洋子
 三木俊子

歌仙「かじけ猫」 佐藤徹心 捌

縁に一献恩に一献かじけ猫
 徹心 肇
 我皆ともに春を待ちをり
 良子 肇
 懸案の新体制を受入れて
 荷夕 肇
 唱和の声が湧き起こる刻
 遊眠 肇
 ほの揺るる池を漕ぎ行く月の舟
 鑑 肇
 後の裕を選ぶは楽しき
 眠 肇
 端正な顔立ち描く芸術祭
 良 肇
 コーンスープは塩の振り過ぎ
 鑑 肇
 突然に人騒がせな女来て
 良 肇

遣つた貰つたない事にする
 眠 肇
 タブロイド見出しだんだん小さくなり
 夕 肇
 はたちの棋士の棋風老獪
 鑑 肇
 月高し正覚坊の背を借りて
 良 肇
 薄暑の浜に遊ぶアマビエ
 鑑 肇
 コロナ消え去る別世界夢に見る
 眠 肇
 鄙には稀な清き政治家
 鑑 肇
 花守が木肌に触れて巡る旅
 眠 肇
 心づくしの菜飯あをぬた
 夕 肇
 ナオ芦丈翁の文台に蝶寄り来る
 良 肇
 太さほど良き小筆重宝
 心 肇
 長幼の序は大切と言ふ野郎
 良 肇
 悩みは尽きぬ恋のシーソー
 心 肇
 体脂肪代謝を上げて君のため
 眠 肇
 あやし巧みなねえやお嫁に
 夕 肇
 道端のマスク拾つてママにハイ
 鑑 肇
 用意ととのふ終天神
 良 肇
 予備校で配る鉢巻必勝と
 眠 肇
 ペットを救ふ募金呼び掛け
 鑑 肇
 吟遊の詩人思案の塔の月
 夕 肇
 残す林檎に祈り込めたる
 心 肇
 ナウ居酒屋にメグレの視線をぞろ寒
 夕 肇
 帰国のカパン本でばんばん
 眠 肇
 苦学して赤貧に耐へ博士号
 鑑 肇
 所望の揮毫秀のひと文字
 眠 肇
 舞ふ花の磨崖仏にも薄化粧
 心 肇
 うぐひすの唄言祝を告ぐ
 鑑 肇

連衆 本屋良子 西田荷夕 内田遊眠
 荒木鑑

福祿寿の座
歌仙「楽しい連句」 根津忠史 捌

楽しいだけが連句ぢやないと初懐紙 忠史
 ここで一服春近き緑 葵
 携帯は鳴れどあたかも知らぬげに 転石
 シエアサイクルの駅に並んで あき子
 月浮かぶ路地裏に猫次々と アンズ
 上手に剥けた里芋の皮 忠史
 後の雛飾る子供ら赤き顔 葵
 おきやんな姉は指図あれこれ 石
 友人を押しつけて取るブーケトス あ
 大リーガーを見事射止める ア
 入国の顔認証に緊張し 史
 杜若咲く三州の里 葵
 蛸壺は深みに沈み月を待つ 石
 教授の椅子はつひに叶はず あ
 二人つつ芥川賞直木賞 ア
 乾の御門誘ひ合はせて 史
 花明り笙の音ひらり風となり 葵
 お遍路さんの巡る山々 石
 ナオ 巣立鳥しつかり磨く太格子 あ
 動物園の河馬人気者 ア
 リモートで出発進行モノレール 史
 香具師のもっとじめぞろ目揃へる 葵
 嫌ひでしょあんな男の娘です 石

令和五年一月二十二日
於 江東区芭蕉記念館

あつといふ間に盗まれたキス あ
 異次元の記憶の中に雪女 ア
 頬かぶりして入る居酒屋 史
 寒やいと背の痛みも遠のきて 葵
 あの戦国も今やはるかに 石
 段々の田毎の月を数へゆき あ
 菊人形師念に念入れ ア
 ナウ 鎌祝卒寿の爺の存在感 史
 ウルトラマンはシユワツチと飛ぶ 葵
 この政局総理はきつと乗り切ると 石
 お薄の茶菓子どれにしようか あ
 花爛漫日本遺産の大鳥居 史
 皆集まれけふは遠足 ア

連衆 石川 葵 林 転石 岩崎あき子
松島アンズ

寿老人の座
歌仙「風雅のバトン」 鈴木千恵子 捌

託さるる風雅のバトン初御空 千恵子
 大福の茶を注ぐたつぷり 秀夫
 どこへやら雛のあられの転がつて 尚子
 新人生は少し緊張 志保子
 春の月ステンドグラスに透かし見む 未悠
 電子機器から時に音する 悠
 発酵の麴の泡のふつつつと 夫
 勝手に好きになつてごめんね 尚
 デートには磨きあげたる赤い靴 香織

共演のたび変はる恋人 織
 噴水は高く高くと吹き競ふ 夫
 路面電車で市内観光 悠
 ホームラン命中させる望の月 尚
 声を囁らしてどぶろくを汲む 夫
 皮茸の豊かに香る山の宿 織
 廊下の隅の壺は古備前 志
 友と訪ふ未完の塔に花の枝 織
 般若心経筆ののどらか 志
 ナオ 逃水のむかう工事の旗振られ 尚
 喫煙所へとそつと抜け出す 尚
 再々校バ切までが秒読みに 尚
 強粘着の付箋三色 織
 サークスのジャグラーの技立て続け 悠
 孫に誘はれスノボ教室 織
 片方の手袋わざと忘れ来て 夫
 画数的に良縁の人 夫
 語尾あげて愛の誓ひも疑問形 夫
 タブラ・ラサなる僕の週末 ※ 尚
 漫才のぼけと突つ込み月笑ふ 志
 拾つた猫に牛膝つき 織
 ナウ 体育の日から始めるジム通ひ 尚
 栄養ドリンク魔女の手作り 悠
 限定でしか買へないといふ醤油 尚
 一弦琴をひとり奏でる 織
 産土の神に守られ花の中 千
 行つたり来たり耕の影 織

連衆 田中秀夫 宮川尚子 北龍志保子
 棚町未悠 平林香織
 ※ナオ十句目 タブラ・ラサ||真つ白な心の状態

令和四年十二月十日 首尾
第十二回猫蓑会リモート
Zoom
12
 1~3

藤袴の座

二十韻「切株は」

箭内敏枝 捌

切株は夫の腰掛小六月 敏枝
 前をゆつくり過る冬蝶 美智子
 カンバスにさつと自画像描き上げて 健
 陶器の鉢が窓辺彩る 純子
 鍵開ける間にもうつろふ今日の月 純
 女心を攫ふ爽籟 健
 藁塚の藁にまみれて密事 枝
 ピアスはずした跡を甘噛み 純
 イタリアへオペラの夢はすてきれず 美
 何処で鳴るやら響く鐘の音 健
 ナオ 子らは皆都会暮らしよ古簾 美
 月光の下西瓜割りする 健
 マンホール蓋をくぐれば秘密基地 美
 枕絵もたせ姫の輿入れ 純
 さまざまな恋を捨て今尼御前 枝
 ペットボトルが転がつてくる 全
 ナウ 白寿てふ楽しき宴の祝酒 美
 木の芽田楽家ごとの味 純
 花の昼乾御門を通り抜け 美
 波打際に磯菜摘む影 健
 連衆 聖成美智子 由井 健 近藤純子

藤裏葉の座

二十韻「霜の菊」

高山鄭和 捌

猫蓑や凜として咲け霜の菊 鄭和
 鶴来る野の息吹切実 転石
 稀覯の書古本市で探すらん 揺子
 手織の紬風合の良く 志保子
 月光に香聞くひとの煽やかに 石
 青菜の虫が好きなら姫君 和
 響きたる地芝居の笛確かにて 志
 ぐづる兎に読むトイストリー 揺
 宇宙へと連れ行く友を募ります 和
 満洲国の夢の様様 石
 ナオ 大発会当たり外れも運のうち 揺
 出初式には酒と木遣で 志
 市長来て今度もどうぞよろしくと 石
 中身不明の厚き封筒 和
 夏の月ティンカーベルの宙返り 志
 気を若くして喜寿の筋トレ 揺
 ナウ 神主と坊主に頼む後始末 和
 流した雛を片付ける人 石
 花のもと子等生きいきと遊びをり 揺
 春の城址を渡るそよかぜ 志
 連衆 林 転石 上原揺子 北龍志保子

若菜の座

源心「枯荻の白」

岩崎あき子 捌

枯荻の風に耐へたる白さかな あき子
 いつも決まつて日記買ふ店 千恵子
 耳近く流行りのロック聞こえて 良子
 石段駆ける野球部の子等 敦子
 百年の鳥居にかかる宵の月 千
 木葉山女を君に振舞ふ あ
 密通をおかめこほろぎ覗きをり 敦
 オートクチュールのスーツ長押し 良
 金継が景色となれる青磁壺 あ
 真贋のほど見抜く鑑定 千
 体中どこに触れても悪知恵が 良
 再放送を楽しみに待つ 千
 艶やかにして寂しさも花万葉 敦
 春日傘さし影とたはむれ あ
 ナオ 先生の黒板の文字めかり時 敦
 ンゴロンゴロに象の群ゆく 良
 サバンナをジープ走らす地溝帯 あ
 酒場の隅で動く賭け金 千
 素裕の烏鷺の戦ひ激しくて 良
 げじげじ嫌と逃げ惑ふ人 敦
 フォークダンス踊るのならば好きな子と 千
 婚活パーティー冴ゆる月影 あ
 愛猫のたま絨毯に寝そべつて 敦

便りないのが無事の印よ
ナウ 振り返るステンドグラスの教会堂

長崎カステラ厚切りが好き
天皇のお手植糸といふ花ふぶく

干潟に遊ぶ浅瀬やどかり

連衆 鈴木千恵子 本屋良子 武井敦子

(P3)「近世俳画の世界」から続く

乗(滝本坊)や本阿弥光悦に求め、俳人では立
圃と蕪村を高く評価している。この記述で興味
深いことは、昭乗・光悦・立圃・一蝶・許六・
乾山(深省)・蕪村という俳画の歴史であり、
芭蕉に言及がないことだ。

芭蕉も元禄五年八月に入門した許六から画を
学んでおり(「許六離別詞」)、とくに晩年には
格調の高い俳画作品を残した。しかし、その数
はそう多くはない。後世への影響という点では、
芭蕉の発句や連句、俳文などに比べて著しく比
重が軽いのである。

とすれば、俳画や俳画賛の特性や歴史を俯瞰
することは、従来の芭蕉中心の俳諧史観では見
逃されていた「俳諧」の魅力を探るといふ、実
に魅力的な意義を帯びることにもなるのであ
る。

筆者プロフィール●伊藤善隆(いとうよしかた)
昭和四十四(1969)
年、東京生まれ。早稲田大学文学部助手、湘北短期
大学教授等を経て、現在は立正大学文学部教授。専
門は近世文学。とくに俳諧と江戸時代前期の漢文学。

令和五年二月二十三日 首尾
第十三回猫蓑会リモート Zoom
13
1~2

二十韻「春の雪」 鈴木千恵子 別

坪庭を二分広くする春の雪 千恵子
点々と恋猫の跡 鄭和
うたた寝の頬に起きよと花舞ひて 徹心
香り染しみ淹れるコーヒー 揺子
赤を帯び緋月かかる西の空 和
菊人形に誘ひ逢引 千
渡り鳥ニヒルに笑ふ別れ際 揺
トラック野郎峠越え行く 心
厄除けのお守りいつも腰につけ 千
巾着切りを泣かす天蚕糸 和
ナオ そよ風が左右に揺らすアドバルーン 心
氷あづきの匙を舂める子 揺
あの人の形見と思ひ大切に 和
甘い囁き耳に残れる 千
月冴えて今宵繻く源氏譚 揺
ふくら雀が遊ぶ掛軸 心
ナウ 異次元にいつしか老師いざなはれ 千
千円あればべろべろになり 和
艶やかに極楽鳥花夏開く 心
麦わら帽の似合ふ銅像 揺

連衆 高山鄭和 佐藤徹心 上原揺子

第十三回猫蓑会リモートでは三巻の
作品を巻きましたが、うち一卷は都
合により次号に掲載します。

二十韻「白湯やはらかに」 古和田雲吞 別

寒明や白湯やはらかに満ちみたる 雲吞
窓辺に香る梅花一輪 良子
入学に英英辞典贈られて 桜千子
大きな飴を頬張つてをり 了斎
ウ 昼月のあばたを撫づる鯉幟 健
守宮の守る古き曲屋 桜
嫁御寮しやんしやん馬の鈴ならし 斎
読み間違へた君のトリセツ 桜
寝巻など着たくはないの朝までは 斎
猫が欠伸をしてる片隅 良
ナオ 托鉢が雪の辻での貰ひ酒 健
切つた張つたの刃傷の沙汰 良
どこからかジタンカポラル匂ふとき 桜
忘れ扇の持ち主は誰 良
月夜なら硝子の靴を履けさうな 吞
秋の渴きは汝ゆゑにこそ 斎
ナウ 頃を見て島めぐりするゼウス神 良
鳥の言葉がわかる村人 斎
花の咲く故郷が好き花が好き 桜
無心に高く上がる風船 健

連衆 本屋良子 鶴飼桜千子 鈴木了斎
由井健

藩主親子の祈り

平林香織



『猫蓑通信』の前号に内田遊眠さんが、「夏の鶴岡にて」という記事を書いておられる。彼女の御尊父は洋画家・石井弥一郎氏だが、そのご先祖は庄内藩士だったという。この十年間鶴岡市で近世和歌や近世俳諧の資料調査をさせていただいている。領内には藩主から藩士にいたるまで勤勉実直でありつつもゆったりとした風合いの民度があったように感じる。弥一郎氏の画風や遊眠さんのお人柄とも通じるものがある。

ここに掲載した軸は、鶴岡市の致道博物館が所蔵している大黒図である。第九代庄内藩主・酒井忠徳が描いた絵の摺物（印刷したもの）に次男・酒井忠器が賛を書いたもの（肉筆）である。大黒様らしい福々しい絵で、忠器の筆も勢いよくのびやかである。賛は、「神と君のめぐみ【恵】みをふかくあふくそ【仰ぐぞ】よこころの的と

むこ【向】ふ朝夕」（神と君のめぐみを深く仰いで心の的と心得、朝夕祈りを捧げている）というもの。俳諧でいう一枚絵の摺物は、正月や月見、立机などの節目に俳諧仲間配るための大量の印刷物だが、この図がいつ何のために摺られ、配られたものか正確にはわからない。

大黒様の使いである鼠が多産であることから豊穰を祈る神であることはよく知られている。したがってこの絵は子年の正月に書かれた可能性がある。忠徳親子の年齢を考えるとこの絵が描かれた子年は、享和四年（1814）・二月から文化に改元）だろう。忠徳は翌年九月に致仕、忠器に家督を譲っている。忠徳は、文武に秀で藩校を整え殖産に力を入れた中興の祖といわれる名君である。忠器の和歌には父への尊崇と父のような藩主を目指すという気概がこめられている。

る。別の可能性もある。

それは大黒講との関連である。当時、大黒様をお祀りするイベントである大黒講が、十一月の子の日に行われていた（「甲子待」「甲子祭」とも）。大黒天はヒンドゥー教のシバ神が中国を経由して日本に入ってきたものとされるが、日本に入ってから、大黒と同じ音なので、大黒主神と習合され、それまでの憤怒の表情が柔和なものに変わった。大黒主神が北方の守護神であり、北方すなわち十二支の子の方角の神様ということで、鼠をその使いと考えるようになった。一年の収穫を終えた農民たちが、実際に感謝しつつさらなる繁栄を祈った。藩主もまた領民・領国の繁栄を祈った。

写真ではよくわからないが、この軸は小ぶりなものでそれほど良い状態ではない。最初は子年の正月に忠器が父の摺物に賛を書き、それを軸装し、以後、毎年十一月の子の日に飾ったのかもしれない。あれこれ想像する楽しみを与えてくれる軸だ。おどかな風合いの軸だが、領民の豊穰と酒井家の繁栄を祈る真摯な思いがしっかりとこめられているように思う。

連句の先達・誌上インタビュー Q & A その① 上月淳子さん

Q1 ● 連句歴はどのくらいになりますか。
A 五十歳で入門しましたので、連句歴四十五年になります。

Q2 ● 連句を始めたきっかけは何ですか。
A 七年の熊本暮らしから解放されて東京

に帰った時、何か新しい事を始めたいと思つて、朝日カルチャーの中をうろろろして連句入門のパンフレットを見付けました。早速事務局へ行き、入門とありますが大丈夫でしょうか、と聞きましたら、御親切にフランクに説明して下さい、俳

朝日カルチャー受講生時代（宗匠立机以前）の、左から内田（房連庵）麻子、上月（冬霞庵）淳子、坂本（緑華亭）孝子の三宗匠



昭和六十（1985）年七月 写真提供：坂本孝子

句をしていたのならと言われ、何となくその場で入門手続きをしてみました。

Q3 ●初めての実作の場はどこでしたか。どのような様子でしたか。

A 初めは朝日カルチャーのお教室でした。恐る恐る入っていきましたら、十四、五人の方がいらして、何処でもいい所に座つてと、気楽に言ってくさいました。講義は前からの続きらしく、先生がみんな付句を考えて来たかとおっしゃって、黒板に皆様の付句を書き出され、何が何だかわからないなりにノートに写して、皆さまの付句が選ばれるのを見ていました。それが私の初日です。

Q4 ●明雅先生との思い出を教えてください。

A 連句を習い始めて十年位の頃のことだったでしょうか。明雅先生のお揃で、歌仙だったと思います。この辺で夏だな、魚がいいな等と連衆が言い出した時、私が独り言にしては大きな声で、「金魚もたまにはフライデー」と言ってしまった。先生が、「何を言うのか、変なことを」とおっしゃったので、「これは中学生が七曜を英語で覚えるために作ったもので、私は金魚もたまにはというところが俳味があつて面白いと思つて覚えていたのです」と申し上げたら、「妙なことを覚えている人だ」と笑われてしまいました。ちよつと固まりかけていた座がほぐれて、それから句が次々と賑やかになつたような気がします。今にして思うと、先生は座をほぐすために不肖の弟子の一言をお使いになったのかと思います。その後も不肖の弟子はたびたび変なことを言い、「何を言うのか」と何度も先生を悩ませました。

Q5 ●連句をやっていて、よかったことは何ですか。

A やっぱり老後を楽しく過ごせたことでしょうか。俳句も長いことしておりますが、一座を囲むことの楽しさには叶いません。老若男女、たくさんのお友達ができました。色々のことをお教えいただき

ました。孫に聞かれて分らない文法も、「今度のお席で教えて頂いてきてあげるから」と言つて、「受験生でも身近にいらつしやるの」と言われ親切に説明して頂いたこともありました。

Q6 ●印象に残っている付け（または、発句、一巻など）を教えてください。

A 「雲上に機長の申す御慶かな」（平成二十年一月）
亡き夫も旅好きで、年末年始の小旅行は欠かしませんでした。退任して閑ができてからは海外にもよく出掛けました。なつかしい思い出です。

Q7 ●連句の後輩にアドバイスがあれば、お願いします。

A 長いことやっていると、「初めてです」とおっしゃる方にお教えることも度々あります。そんなとき、座が終わつて「如何でしたか」とお尋ねすると、「一度では分からないけれど、楽しかった」とおっしゃって下さるかたも何人もいらつしやいます。その時、私は、「三年御辛抱下さいね。がんばりましょう」とよく申しました。後になつて、「あの時の三年辛抱の言葉を頼りにやってきました。難しさも楽しさも分かってきました」と言つてくださる方に出会えると、よかったなと嬉しく思います。

● 既往の行事

- 令和五年一月二十二日（日）に、第百六十二回猫養会例会（令和五年初懐紙）をアルカディア市ヶ谷にて開催し、生生庵青木秀樹前会長追悼の興行としました。今号p4をご参照ください。

● 今後の行事予定

- 令和五年四月二十六日（水）に、亀戸天神社にて、第百六十三回猫養会例会（藤祭例会）を開催。神楽殿にて正式俳諧興行（一般公開）の後、二十韻興行。
- 六月二十五日（日）に、アルカディア市ヶ谷にて、第三十三回猫養同人会総会を開催。歌仙興行。
- 七月十七日（月）に、江東区芭蕉記念館にて、第百六十四回例会（猫養会総会）を開催。歌仙興行。
- 十月十八日（水）に、江東区芭蕉記念館にて、第百六十五回例会（芭蕉忌・明雅忌）を開催。正式俳諧興行の後、源心興行。

● 猫養会リモート

- 令和四年十二月十日（土）開催の第十二回、今年二月二十三日（木）開催の第十三回の作品を今号のp8、p9に掲載（一部次号に掲載予定）。
- 第十四回は六月十日（土）、第十五回は八月十一日（金・祝日「山の日」）の午後一時から開催します。猫養会公式サイトなどでご確認ください。

● リモート連句講習会を開催します

- ご希望があれば奇数月第二土曜日午後「猫養会リモート室」にてリモート連句講習会を開催します。

す。筆記係やホストを務めるために必要な事柄も。ご希望の方は、平林香織《khira884@gmail.com》宛にメールでお申し込み下さい。その他の「猫養会リモート室」使用申し込みも平林まで。

● 猫養基金にご協力ありがとうございます

- 井上玲虹様 令和五年一月 一万円
- 永井信夫様 令和五年二月 三千元

基金口座 みずほ銀行新宿新都心支店

猫養基金 普通預金 3376045

● 会員の併号変更

中谷千恵（石川県） ↓ 中谷銀河 に変更

● 会員の訃報

- 同人会員、染谷佳之子様が、二月二十八日に永眠されました。享年九十四歳でした。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。
- 同人会員、朱鷺庵宗匠橘文子様が、三月二十三日に永眠されました。享年九十歳でした。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

● 各種募吟にふるってご応募ください

- いしかわ百万石文化祭2023 連句の祭典
- 応募受付期間 令和五年二月一日～五月十五日
- 応募要項、応募先などは、いしかわ百万石文化祭2023ホームページ、加賀市ホームページ、一般社団法人日本連句協会ホームページなどでご確認ください。

● 猫養会の資料

- 『猫養通信』バックナンバーは、猫養会公式サイト

ト《<http://www.neko-mino.org>》内の「資料庫」にて、創刊号以後の全号のpdfファイルを開覧ダウンロードできます。

- 東明雅師が昭和五十八（1983）年に創刊編集、平成六（1994）年八月発行の第四十五号をもって終刊した『季刊連句』の全号も、猫養会公式サイト「資料庫」にて閲覧、ダウンロードできます。
- 同じく「資料庫」にて、東明雅師による『芦丈翁俳諧聞書』、さらに『猫養庵東明雅先生追悼集・安曇野は昏れて紫』、『芦丈翁三十三回忌記念誌』なども閲覧、ダウンロードできます。



季刊 『猫養通信』第百二十号

令和五年四月十五日発行

発行人 猫養会 鈴木千恵子

事務局 佐々木有子

〒161・0033

東京都新宿区下落合4・9・34・313

編集人 鈴木了斎

編集委員 奥野美友紀・佐々木有子・鈴木千恵子・

武井雅子・平林香織・御園魚彦

（五十音順）

印刷所 印刷クリエート株式会社